千葉県教育振興財団調査報告第637集

# 木更津市田向遺跡

－ 住宅市街地基盤整備埋蔵文化財調査報告書 －

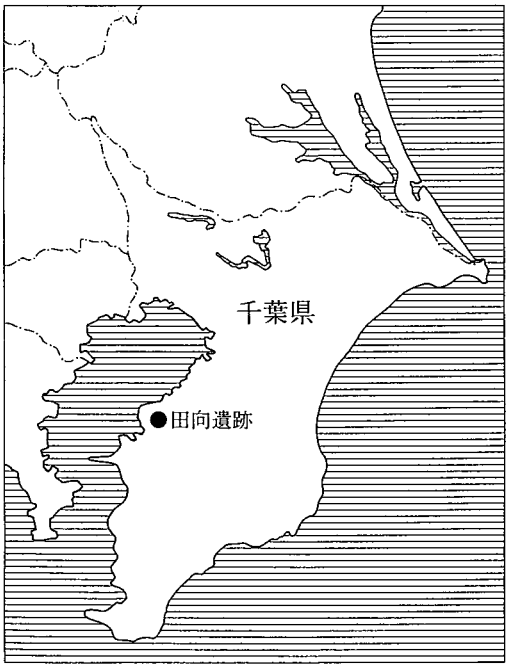
平成22年2月

千 葉 県 県 土 整 備 部

財団法人　千葉県教育振興財団

# 木更津市田向遺跡

－ 住宅市街地基盤整備埋蔵文化財調査報告書 －



# 序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は，埋蔵文化財の調査研究，文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され，以来，数多くの発掘調査を実施し，その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび，千葉県教育振興財団調査報告第637集として，千葉県君津地域整備センターの住宅市街地基盤整備事業に伴って実施した木更津市田向遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では，奈良・平安時代の遺物を検出し，この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり，この報告書が学術資料として，また埋蔵文化財の保護に対する理解を深める資料として広く活用されることを願っております。

終わりに，調査に際し御指導，御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関，また，発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年２月

財団法人千葉県教育振興財団
理事長　篠塚俊夫

# 凡　　例

1　本書は，千葉県君津地域整備センター君津整備事務所による住宅市街地基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県木更津市江川字廻り田６１５－３ほかに所在する田向遺跡（遺跡コード206-019）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は，千葉県君津地域整備センターの委託を受け，財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者，実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は，主席研究員　雨宮龍太郎が行った。

6　本書で使用した地形図等は，下記のとおりである。

第１図　国土地理院発行地形図「奈良輪」1/25,000（昭和37年測量・平成９年修正）
「木更津」1/25,000（大正10年測量・平成９年修正）

第２図　木更津市発行　1/25,000地形図Ⅸ－LE11－４（昭和60年測量・平成６年修正）
1/25,000地形図Ⅸ－LE12－３（昭和60年測量・平成６年修正）
1/25,000地形図Ⅸ－LE21－２（昭和60年測量・平成６年修正）
1/25,000地形図Ⅸ－LE22－１（昭和60年測量・平成６年修正）

第８図　国土地理院発行土地条件図「木更津」1/25,000（昭和45年調査）

7　周辺地形航空写真は，京葉測量株式会社による昭和42年撮影の1:10,000のものを使用した。

8　本書で使用した座標値は，すべて日本測地系に基づく平面直角座標で，図面の方位はすべて座標北である。

9　図面等におけるスクリーントーン及び記号等の用例はそれぞれに明示した。

10　発掘調査から報告書の刊行に至るまで，千葉県教育庁教育振興部文化財課，木更津市教育委員会，千葉県君津地域整備センター君津整備事務所，海上自衛隊航空補給処の御指導・御協力を得た。

# 本　文　目　次

序文
凡例
第１章　はじめに ……1
　第１節　調査の経緯 ……1
　第２節　調査の方法 ……1
第２章　遺跡周辺の歴史的環境 ……3
　第１節　周辺の諸遺跡 ……3
　第２節　調査範囲の基本層序 ……3
第３章　検出した遺構と遺物 ……8
　第１節　調査の概況と調査区の層序 ……8
　第２節　遺物包含層 ……8
　第３節　出土遺物 ……12
第４章　まとめ ……15
報告書抄録

# 挿　図　目　次

第１図　田向遺跡の位置と周辺の遺跡 ……4
第２図　遺跡の調査範囲 ……5
第３図　基本層序 ……6
第４図　調査区全体図 ……9
第５図　調査区の層序 ……10
第６図　拡張区遺物出土状況 ……11
第７図　出土遺物 ……13
第８図　土地条件と遺跡の立地 ……16

# 図　版　目　次

図版１　田向遺跡周辺の航空写真
図版２　北部調査区（北から）
　　南部調査区（北から）
　　南部調査区（南から）
図版３　トレンチセクションＡ－Ａ'
　　トレンチセクションＢ－Ｂ'
　　トレンチセクションＣ－Ｃ'
　　トレンチセクションＤ－Ｄ'
　　トレンチセクションＥ－Ｅ'
図版４　拡張区遺物出土状況（上部）
　　拡張区遺物出土状況（下部）
図版５　出土遺物（１）
図版６　出土遺物（２）

# 第１章　はじめに

## 第１節　調査の概要

千葉県君津地域整備センター君津整備事務所は，木更津市江川地区における住宅市街地基盤整備事業を計画した。この事業に当たって，事業者は千葉県教育委員会に，事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについての照会を行った。これに対して，千葉県教育委員会は事前の工事立会いを行い，試掘を実施したところ遺物が検出されたので，遺跡の発掘調査を必要とする旨回答した。

遺跡の取り扱いについては，千葉県教育委員会と千葉県君津地域整備センター君津整備事務所は協議を重ねた結果，財団法人千葉県教育振興財団が千葉県君津地域整備センター君津整備事務所との委託契約を締結し，発掘調査を実施することとなった。

発掘調査及び整理作業は平成21年度に実施され，担当した組織，担当者と期間は以下のとおりである。

発掘調査　期　間　平成21年10月15日～平成21年10月29日
　　中央調査事務所長　折原　繁
　　担　当　主席研究員　雨宮龍太郎
整理作業　期　間　平成21年10月30日～平成21年11月15日
　　中央調査事務所長　折原　繁
　　担　当　主席研究員　雨宮龍太郎

なお，田向遺跡は近隣地において以下の調査歴があり，今回の調査は第６次調査に相当する。

第１～３次調査　県単道路改良（幹線）関連調査
　　期　間　①平成11年10月１日～平成11年11月30日
　　②平成12年９月１日～平成12年10月12日
　　③平成14年11月１日～平成14年12月25日
第４・５次調査　木更津都市計画道路３・３・７号中野畑沢線関連調査
　　④平成15年１月７日～平成15年３月28日
　　⑤平成16年６月１日～平成16年６月25日

## 第２節　調査の方法

調査地は木更津市江川字廻り田615－３ほかに所在する。海上自衛隊航空補給処構内に位置し，主要地方道袖ケ浦・中島・木更津線沿道の南北に細長い地形である。調査面積は2,147㎡である。確認調査は215㎡の確認トレンチを設定し，調査地形が細長いために，地形にあわせて基本的には一列に断続的に配置した。

確認調査の結果，表土下には砂質土が厚く堆積しており，ローム土は検出されず，一部で発掘中に湧水が発生したため，上層のみの調査で終了した。

調査に当たっては，調査地をカバーして公共座標に合致する20m×20mの大グリッド展開図を

設定した。東西罫は西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…，南北罫は北から南へ１・２・３…と符号した。南北罫が途中から始まっているのは，過去の調査の際のグリッド表示に合わせたためである。

大グリッドの内部は100等分割して，２×２ｍの小グリッドを設定し，00から99までの番号を付して，調査地点の限定や遺物収納の際の便宜を図った。

# 第２章　遺跡周辺の歴史的環境

## 第１節　周辺の諸遺跡（第１図）

田向遺跡の調査地点 (1) は，付近を流れる小櫃川の旧河道跡と思われる小谷状の盛り土地に立地している。標高は1.9m～2.7mで，低湿地に近い土地条件である。

田向遺跡調査地点の北方には，主要地方道袖ケ浦・中島・木更津線の沿道に，同遺跡第１～３次調査地点 (2)，第４・５次調査地点 (3) が連なっている。第１～３次調査地点からは，古墳時代前期の竪穴住居跡３軒，奈良・平安時代に属する掘立柱建物跡１棟，井戸状遺構４基，土坑39基，溝状遺構52条，水田跡２面，畑跡２か所，柱穴85基が検出された。また第４・５次調査地点からは，奈良・平安時代の掘立柱建物跡６棟，土坑４基，溝状遺構29基等が明らかになった。現時点での遺跡分布調査や発掘調査の成果によれば，縄文時代から古代にかけての遺跡分布は，田向遺跡よりもすべて東方，つまり内陸に位置しており，本遺跡が海側の遺跡限界に相当することは注意してもよいであろう。

周辺地域において遺跡の存在が確認できるのは縄文時代以降である。四宝塚遺跡 (4)，高砂遺跡 (5)，本郷三丁目遺跡 (6)，水深遺跡 (7) が判明しており，四宝塚遺跡からは縄文後期土器が，そのほかの遺跡からは縄文晩期土器が出土している。いずれの遺跡からも土器の出土のみが報告され，明確な遺構の存在はまだ確認されていない。

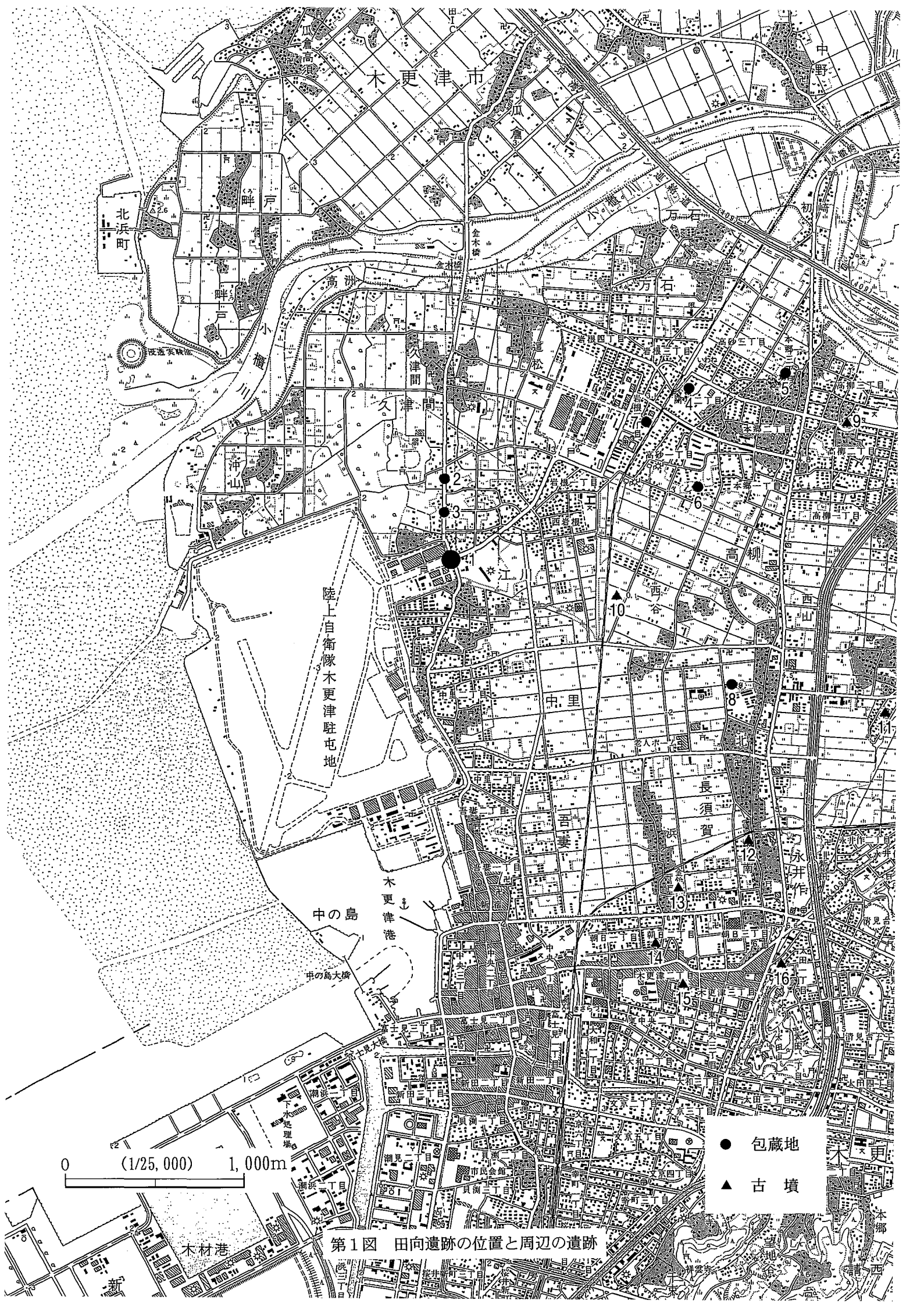
この地域に遺跡が定着するのは弥生時代に入ってからである。四宝塚遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡が検出された。高砂遺跡からは弥生中・後期の竪穴住居跡や方形周溝墓，古墳時代前期の竪穴住居跡等が発見された。本郷三丁目遺跡は弥生後期から古墳時代前期の集落跡である。水深遺跡では弥生後期の集落跡が検出されている。松山遺跡 (8) は弥生後期から平安時代にかけての集落跡の一部である。

弥生時代に形成されはじめた集落を中心とする人々の暮らしは，古墳時代に入ってからも順調に発展していったようである。古墳時代後期を中心とする相次ぐ大型前方後円墳の造営活動は，そのことを如実にものがたっている。この地に営まれた大型前方後円墳は，高柳古墳 (9)，銚子塚古墳 (10)，浅間古墳 (11)，丸山古墳 (12)，金鈴塚古墳 (13)，さかもり塚古墳 (14)，稲荷森古墳 (15)，鳥越古墳 (16) 等があげられる。このうち銚子塚古墳は全長132mの規模を誇り，県史跡に指定された金鈴塚古墳は，豊かな副葬品を出土し，全国的にも著名である。

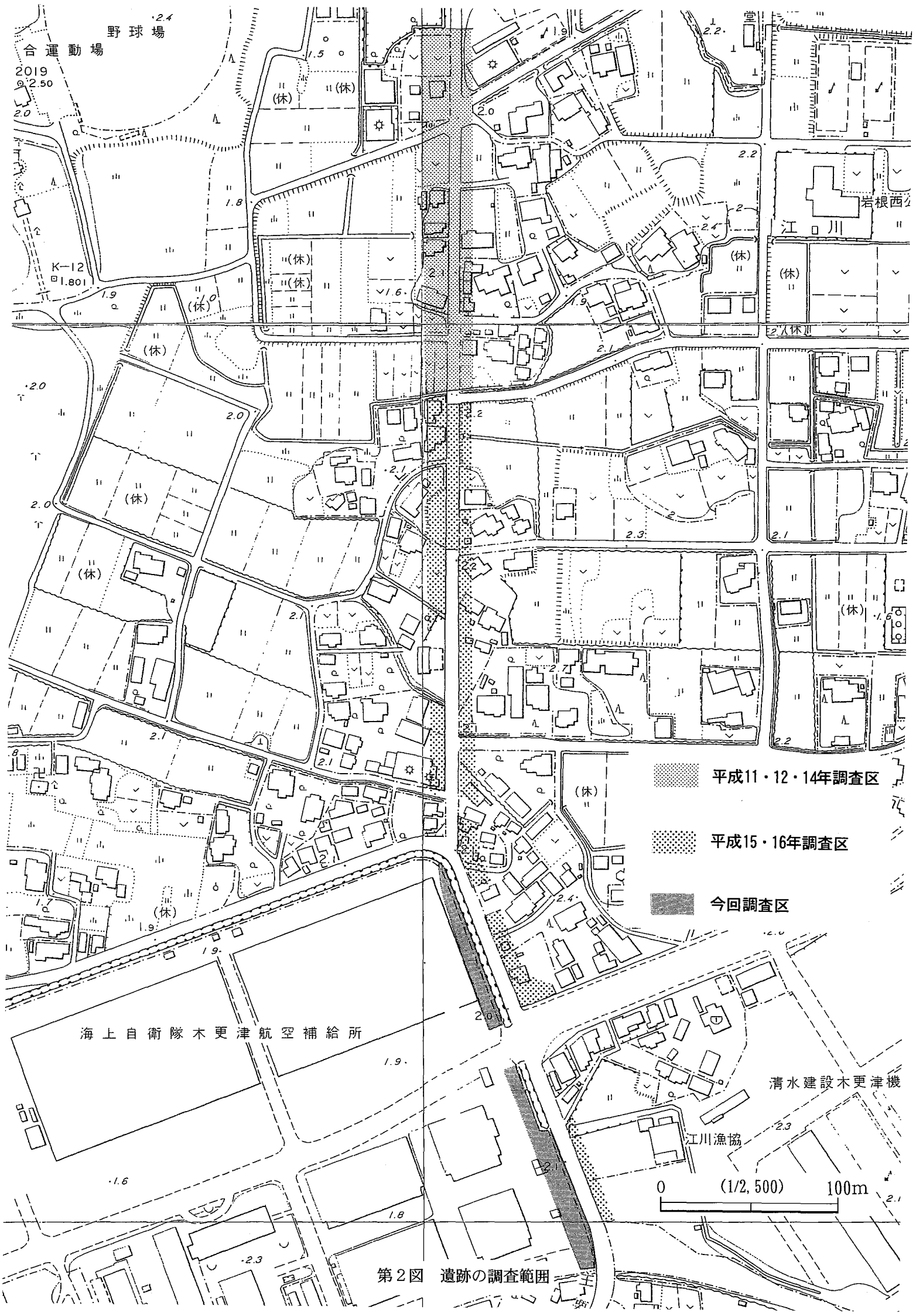
## 第２節　調査範囲の基本層序（第２図，第３図）

田向遺跡は今回も含めて通算６次の調査を経ている。各調査区域は南北に連続しているので，過去の調査成果を活用して，本遺跡の基本層序を再構成してみよう。

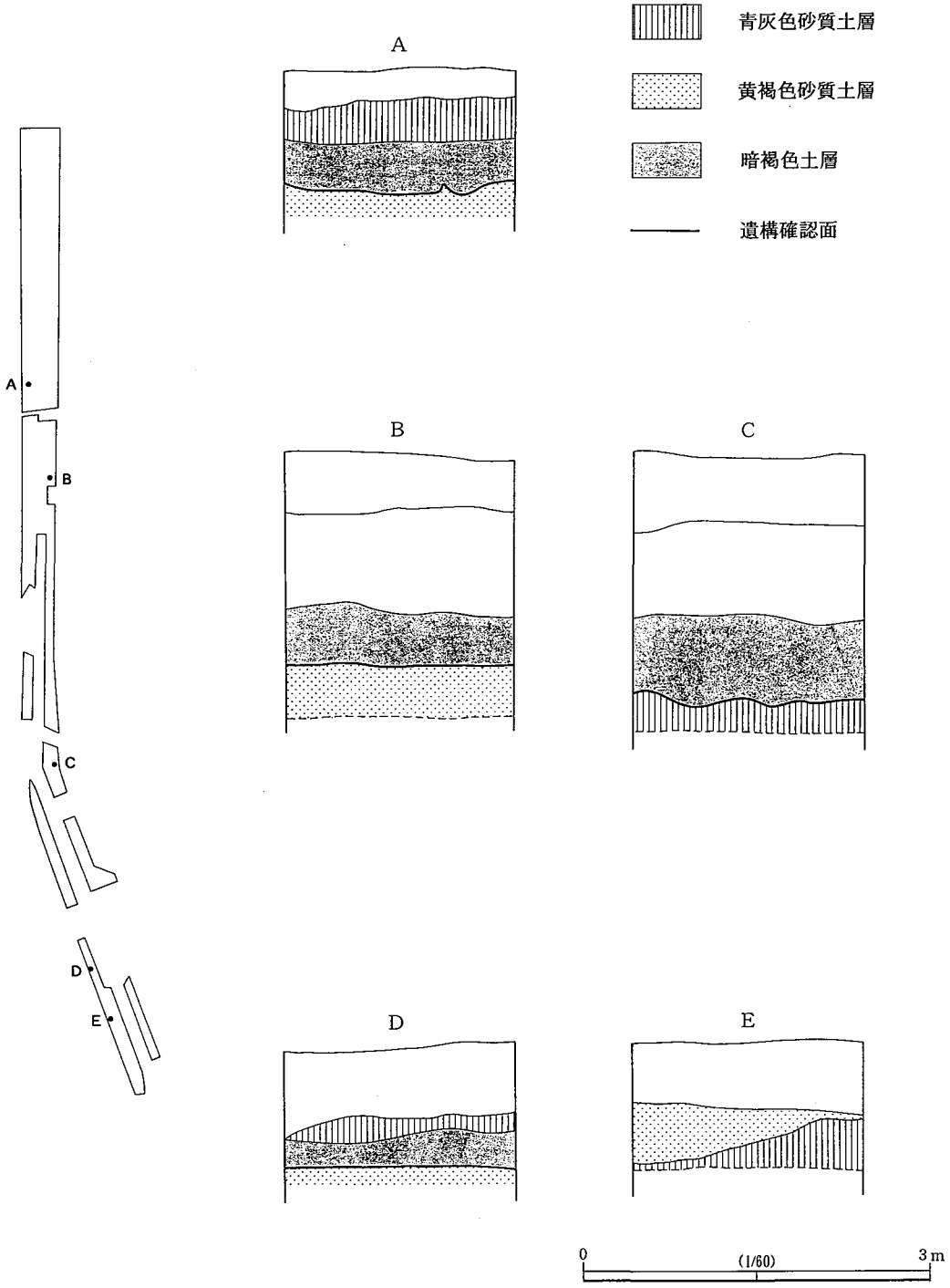
抽出地点では最上層は盛り砂層，その下部にしばしば新しい撹乱層が覆っているが，鍵となる層はその下に堆積する青灰色砂質土層，黄褐色砂質土層，暗褐色土層である。前二者の砂質土層には，しばしば多量の小貝片が含まれている。３回の調査をふまえて暗褐色土層が遺物包含層となり，ひいては遺構覆土を構成していることが明らかとなった。この暗褐色土層に対して，他の




第1図　田向遺跡の位置と周辺の遺跡


野球場
合運動場
2019
2.50
K−12
1.801
江川
岩根西
平成11・12・14年調査区
平成15・16年調査区
今回調査区
海上自衛隊木更津航空補給所
清水建設木更津機
江川漁協
0
(1/2,500)
100m

第2図　遺跡の調査範囲




第３図　基本層序

２層がどのように堆積しているかが着眼すべき点と思われる。

まずＡ地点とＤ地点は共通しており，暗褐色土層の上層に青灰色砂質土層が乗り，下層には黄褐色砂質土層が堆積している。これが一つのパターン（Ⅰ）となる。もう一つのパターン（Ⅱ）はＢ地点とＣ地点に見られる。ここでは暗褐色土層の上には青灰色砂質土層が存在しないことが特徴となる。暗褐色土層の下層には黄褐色砂質土層または青灰色砂質土層が堆積している。そしてＥ地点では青灰色砂質土層と黄褐色砂質土層の関係を示唆する好適な状況が観察できるのである。暗褐色土層の成因は通常の台地上に見られるそれと同様に，沖積世に形成された本来有機質の腐食土系層であり，とくに人間集団の長年にわたる生活活動に伴って顕著に堆積されるようである。いっぽう青灰色にせよ黄褐色にせよ砂質土層は，遺跡周辺が河川の氾濫や津波の影響を受けて，一帯が長期間の浸水状態にあった際に形成されたもので，それが貝片を含んでいることから，海とつながって汽水性の潟地を呈していたことを示していよう。

パターン（Ⅰ）からは暗褐色土層をはさんで二枚の砂質土層が存在するが，これがこの地区の基本的な層序であろう。パターン（Ⅱ）では暗褐色土層上の砂質土層が見られないが，それは後世の撹乱を受けた際に消失したものと考えられる。たかだか数十メートルしか離れていない地点で，浸水を受けた場所とそうでない場所が併存したとは考えられない。すなわち浸水後，水がひいた後に入植した遺跡周辺の人々は，再度の浸水を被り，この地を去っていったという歴史のひとこまが復原できる。

次に２種類の砂質土層の性質を考えてみよう。パターン（Ⅰ）では暗褐色土層の上に青灰色砂質土層が堆積している。ここから，暗褐色土層よりも青灰色砂質土層の方が新しいという結論が得られる。ところがパターン（Ⅱ）のＣ地点では，暗褐色土層が青灰色砂質土層の上に乗っており，新旧関係が逆転している。この現象は遺物包含層が，土層観察上初度の浸水後に形成されたのか，または再度の浸水後に形成されたのかを判断するに当たり，矛盾しており，その理解に混乱を引き起こす。しかしＥ地点の土層を観察すると，その矛盾が氷解するのではないか。ここでは青灰色砂質土層と黄褐色土層が斜めに接触していて，一応黄褐色土層の方が新しいのであろう。しかし２種類の砂質土を別物ととらえる以前に，それらの混合状態として一括し，全体を単一層として短時間に形成されたものと把握するべきであろう。２種類の砂質土の境界線は非常に明瞭であり，いずれ両者が一方から一方へと変色するとは考えられない。そのことから，両者の形成された場所は異なっていたのであろう。異なった場所に存在した異なる砂質土が，一度の氾濫によって同一地点にもたらされ，Ｅ地点に見られるような混合状態を呈するにいたったと考えられるのである。このように考えれば，砂質土層の色の違いによってその新旧を判断することは不可能になる。すなわちＣ地点に見られる青灰色砂質土は，他地点で普遍的に存在する暗褐色土層直下の黄褐色土と互換関係にあるといえる。

# 第３章　検出した遺構と遺物

## 第１節　調査の概況と調査区の層序（第４図，第５図）

田向遺跡の発掘調査に当たっては，確認トレンチを設定・発掘して遺構の有無を調査し，各所のトレンチ壁面の土層断面を実測・写真撮影して記録化した。調査区は南北に細長い形で，とくに北端部では幅が狭く，重機の稼働や排土場の確保が困難なために，トレンチを設定することができなかった。

調査区は低湿地に近い土地条件で，地下水位が高いので，北部では80cm，南部では120cmほど掘り下げると水が湧きはじめる。北部の水位が高いのは，調査区が含まれる海上自衛隊の敷地の周囲に排水路が設置されているためと考えられる。

確認された遺構は，奈良・平安時代の遺物包含層１か所である。調査区全体の遺物散布状況はきわめて希薄で，遺物包含層以外からはまったく検出されなかった。

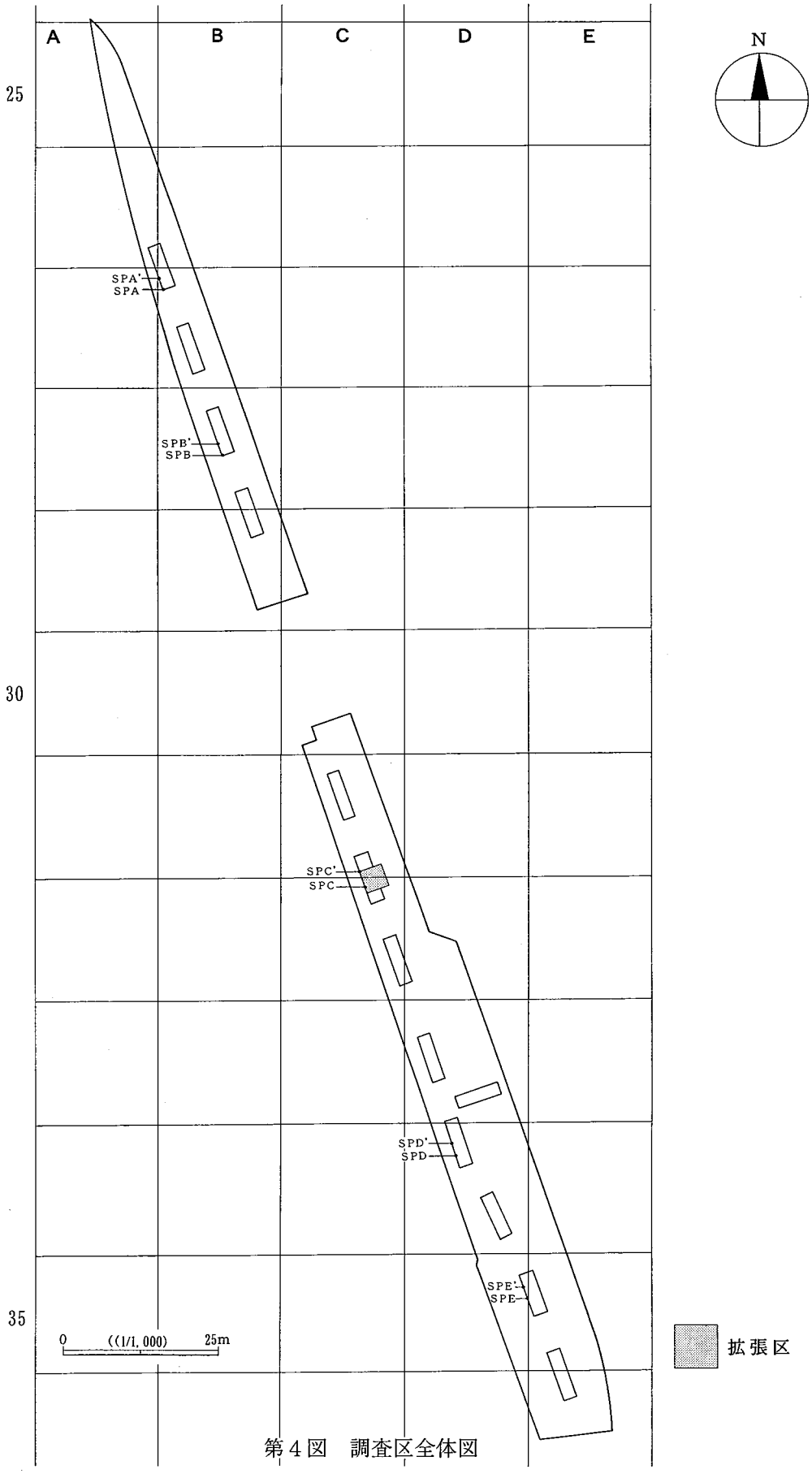
調査区内の５地点からトレンチ壁面の土層断面を記録した。このうちSPC-C’とSPD-D’はそれぞれ第３図Ｄ・Ｅと同一地点である。北部の２地点では，掘り下げているうちに湧水がはじまり，その深さで発掘を中止せざるを得なかった。いずれの地点も最上層は，近現代の盛り砂またはゴミ混じりの盛り土であり，南部においてとくに顕著である。SPA-A’の１層，SPB-B’の１層，SPC-C’の１～４層，SPD-D’の１～４層，SPE-E’の１～３層が相当する。南部ではこの人為的な最上層中から，多数の埋設管や建物の土台の一部が検出されている。配管のなかには錆びついてかなり古めかしいものが混じっているので，今次戦前の旧海軍時代以来の土地改良工事が想定される。

遺構確認面や遺物包含層が検出されるのは，その下部に堆積した青灰色系及び黄色系の砂質土層である。この両者の関係については前章で説明したように，河海の一度の氾濫で同時に運び込まれた可能性が考えられる。SPB-B’の２層と３層の関係，SPD-D’の５層と６・７層の関係はそれにあてはまる。またSPB-B’の２・３層と６層，SPC-C’の５層と７層の関係は，間層を混じえているので，観察範囲で判断する限り，通常の新旧認識が適用できるであろう。なお，遺構覆土や遺物包含層とみなされる暗褐色土層が確認されたのは，次節で報告する遺物包含層のみであった。

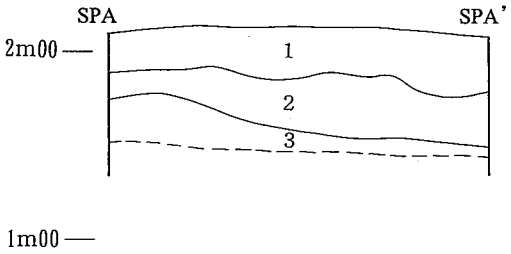
なお，SPC-C’の遺物包含層である６層について，興味深い事実が観察されている。それは６層最上面の数か所に小波頭状に渦を巻きかけた攪拌部分が存在することである。よく観察すると，それは直上に５層が乗る範囲に限られ，４層が覆う部分にはみられない。この現象は，氾濫の際に透水性が高い５・６層の上やその中を，氾濫水や地下水が，勢いよく通過・伏流したことを示している。４層が覆う部分にそれが見られないのは，後世堆積した透水性の低い４層に下部の６層が圧迫され，その最上面が圧縮されて平坦化したものと考えられる。

## 第２節　遺物包含層（第６図）

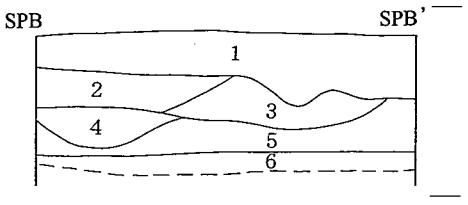
調査区南部の北寄りのトレンチにおいて，発掘作業が暗褐色土層に達した直後から土師器の小


A
B
C
D
E
25
30
35
N
SPA'
SPA
SPB'
SPB
SPC'
SPC
SPD'
SPD
SPE'
SPE
0
(1/1,000)
25m
拡張区

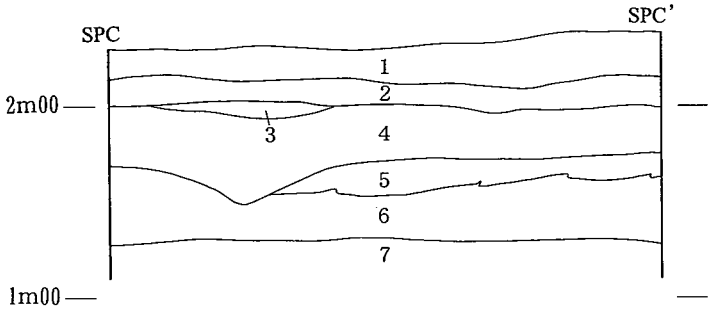
第４図　調査区全体図



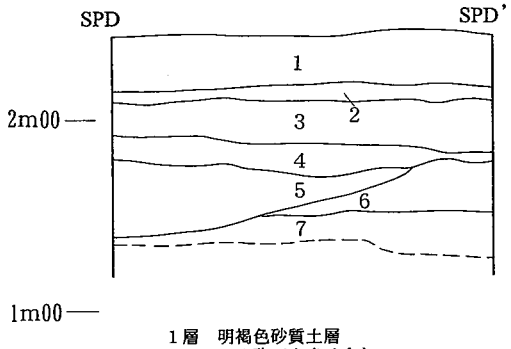

1層　暗褐色砂質土層
　　拳大栗石を多く含む
2層　明青灰色砂質土層
　　小貝片を含む
3層　暗青灰色砂質土層
　　小貝片を含む



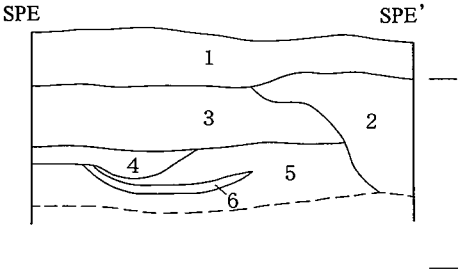

1層　暗褐色砂質土層
　　拳大栗石を多く含む
2層　明青灰色砂質土層
　　小貝片を含む
3層　明黄褐色砂質土層
　　小貝片を含む
4層　暗青灰色砂質土層
　　小貝片を含む
5層　暗青灰色砂質土層
　　小貝片を僅かに含む
6層　暗青灰色粘質土層
　　含水度が高い



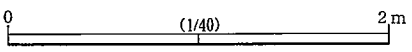

1層　暗黄褐色砂質土層
2層　暗褐色土層
　　1層を混じえて，ゴミを含む
3層　白色粗粒砂層
4層　暗灰色土層
　　小礫・ゴミを含む
5層　暗青灰色砂質土層
6層　暗褐色土層
　　黒色に近い遺物包含層
7層　明黄褐色砂質土層




1層　明褐色砂質土層
　　小砕石を多く含む
2層　暗褐色土層
3層　明灰色砂質土層
　　砕石を多く含む
4層　明茶褐色砂質土層
　　1 cm 未満の石粒を多く含む
5層　明褐色砂質土層
　　小貝片を含む
6層　明青灰色砂質土層
7層　暗青灰色砂質土層
　　小貝片を含む




1層　明褐色砂質土層
　　小砕石を多く含む
2層　褐色土層
　　ゴミを多く含む撹乱土
3層　緑褐色土層
　　ゴミを含む
4層　青灰色砂質土層
　　小貝片を多く含む
5層　青灰色砂質土層
　　微細な貝片を含む
6層　白色小貝片充填層

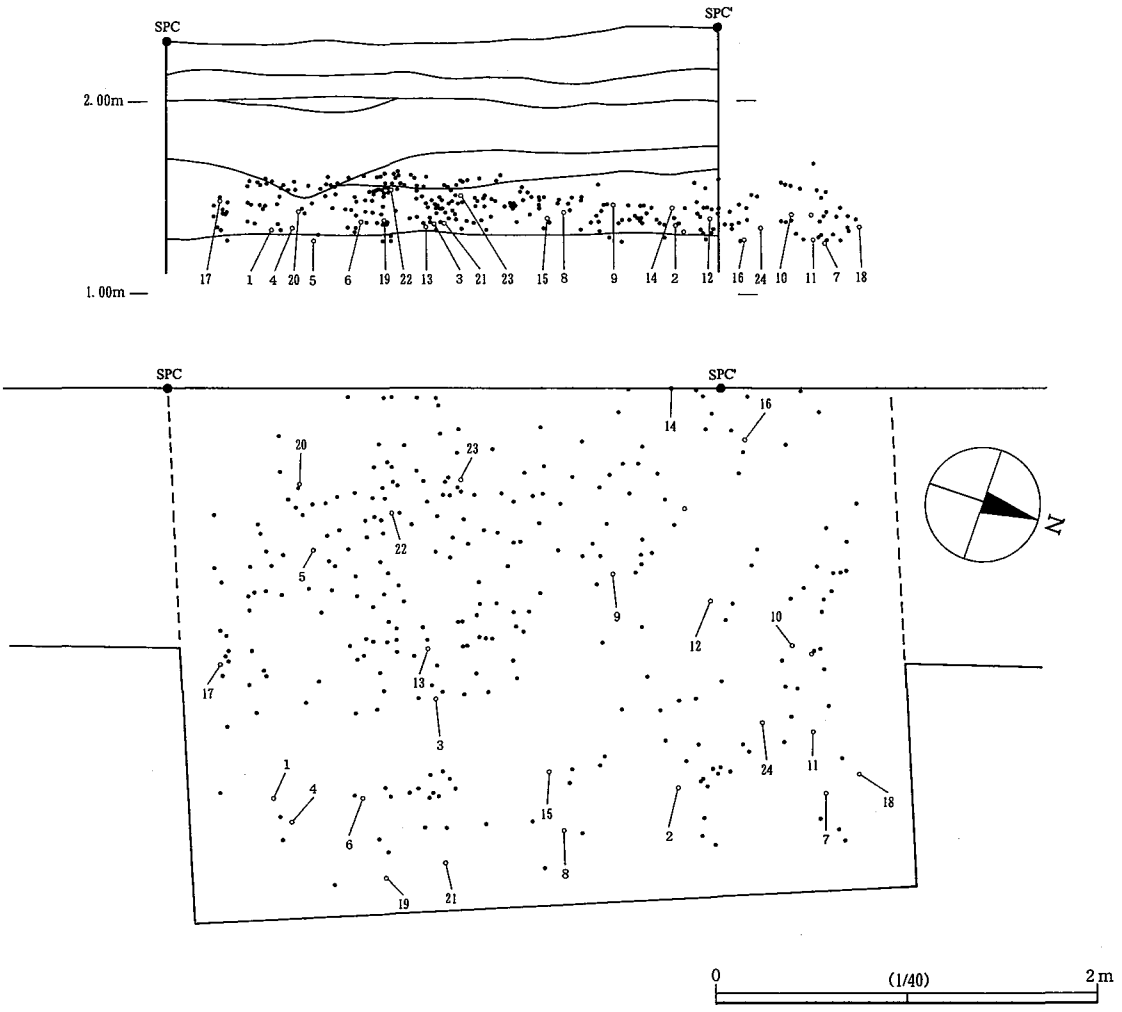



第５図　調査区の層序

片が出土しはじめたので，東西2.7m，南北3.8mの広さで拡張精査を実施した。遺物の出土状況からは，この程度の拡張では不十分であるが，調査区内東側に桜樹が並木状に植栽されているのと，南側では旧建物の土台が遺物包含層を撹乱しており，さらに遺物出土状況写真からもわかるとおり，この地点の地下には縦横に新旧埋設管が敷設されているので，重機の使用が大幅に制限されざるを得なかった。したがって上記規模での拡張が精一杯であり，遺物包含層の範囲を確認するにはいたらなかった。

出土した遺物はすべて土器片で，土師器と須恵器から構成され，総数295点を数える。なかでも土師器が圧倒的に多く，須恵器は８点にすぎない。出土した層位はほとんどが６層の黒色に近い暗褐色土層であり，その直下の明黄褐色砂質土層に達すると，出土をみなくなる。平面分布的には，北部よりも南部の方が密度が濃い傾向がある。須恵器の分布は比較的均等であり，とくにそれだけで集中するということはない。

出土土器の全体的な特徴は，いずれも小片であることで，最大のものは次節に図示した６（土師器：縦7.6cm，横5.5cm）と18（須恵器：縦7.5cm，横6.0cm）であり，ほかの破片は２～３cmのサイズが多数を占めている。第二の特徴は土師器にみられるもので，周縁断面が摩滅している破




第６図　拡張区遺物出土状況

片が多い点である。器種を判断できる破片をみる限り，土師器，須恵器ともに甕形土器が多数を占め，少数の坏形土器が伴っている。そのほかの器種は確認できなかった。

この遺物包含層の性格は，結論を先にいえば，河海の氾濫の際に生じた一時的な自然水路の一部であろうと考えられる。その規模から推して，旧河道と呼べるほどおおげさなものではない。以下にその根拠をあげてみよう。まず遺物包含層最上面の攪拌現象が，前述のように，遺物包含層の上やその中を水が勢いよく流れたことをものがたっている。次に遺物の分布状況からは，圧倒的な量の土師器片の中にわずかな須恵器片が均等に散布している事実があげられる。土師器の量が多いのは須恵器に比べて，軽量で強い水圧に対して流されやすいためであり，須恵器の均等な散布状況も，そこに人為的な影響が全く認められないことを示していよう。さらに出土した土師器の縁辺断面が摩滅しているものが多いことは，土器表面が水流に強く洗われていたことをよく表している。

## 第３節　出土遺物（第７図）

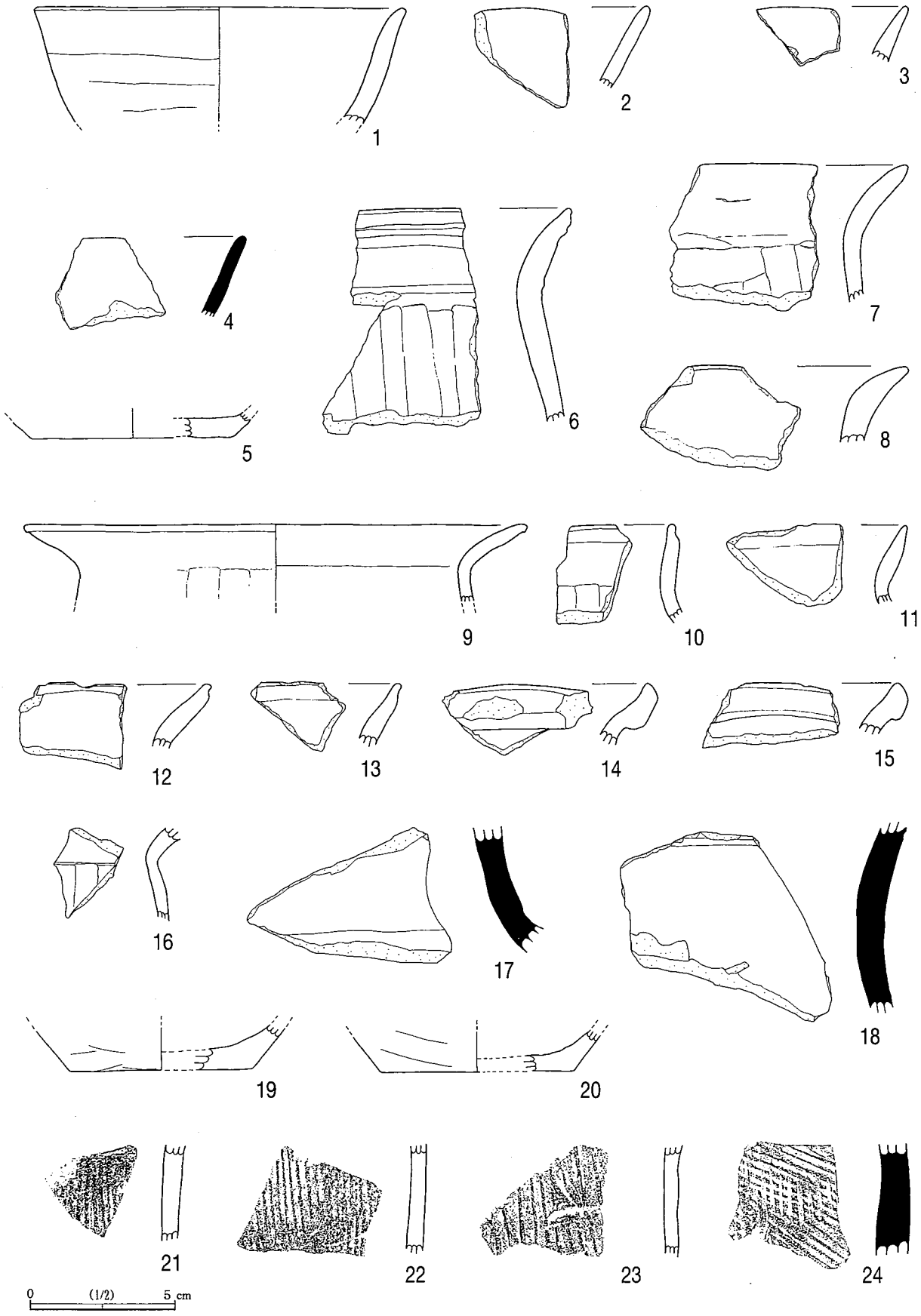
出土遺物はすべて遺物包含層からのもので，いずれも小片ばかりであることは，前述したとおりである。器種の判明する個体を選んで図示したが，小片すぎて土器の器高や口径，底径等重要部位の精確な復原は，ほとんど不可能である。

１～５は坏形土器で，４は須恵器である。６～20は甕形土器で，17・18は須恵器である。21～24は甕形土器にみられるタタキ目をとりあげた。24は須恵器である。

１～４は坏形土器口縁部である。１は非ロクロ土器で，明褐色を呈し一部に黒斑がみられる。椀に近い器形で，口縁部には強い横ナデが施され，口縁は若干外反する。２～４にはロクロが使用されている。２は赤褐色で，薄い器壁が特徴的である。３は明褐色で，口縁はやや外反する。４は明灰色で，口縁は直線的に外傾している。５はロクロ使用の坏形土器底部で，明橙色を呈する。摩滅が甚だしく，底部外面のロクロ目は判然としない。底部には薄い器壁が取り付いている。

６～15は甕形土器口縁部である。単純口縁タイプは７・８・９・11，強い横ナデで口唇部を作出するタイプは６・10・12・13，二重口縁タイプは14・15である。６は明褐色を呈し肌色を帯びる。胎土にはわずかに雲母・石英が含まれる。胴部には弱い縦ヘラナデが施される。常総型の甕である。７は暗赤褐色で，口縁は横ナデ，胴部には縦ヘラケズリが施される。８は明褐色で，短い口縁が外反する。小型甕であろう。９は暗赤褐色で，器壁は薄く，緻密な胎土である。口唇部はわずかに引き出されている。10は明橙色で，胎土は緻密である。口唇部が強くつまみ出されている。11は明褐色で，口唇部は強くシメられて薄くなっている。小型甕であろう。12は褐色を呈し，胎土は緻密である。13とともに口唇部が強調されている。13は暗赤褐色である。14は表面は暗褐色，内部は赤褐色を呈する。二重口縁の外周は強くナデられ平滑化している。須恵窯で焼成された，ロクロ使用が想定されるくすべ焼成土器である。15は表面は黒色に近い暗褐色，内部は暗赤褐色を呈する。14と同種土器であるが，口径は小さくなる。

16～18は甕形土器頚部である。このうち17・18は須恵器である。16は「く」字状に強く屈折する小型甕の頚部破片である。器の厚みは均一で，口縁は強い横ナデ，胴部は縦のヘラナデが施されている。頚部の屈折の鋭さや器壁の均一性から判断して，この土器は古墳時代初期の製品の




第７図　出土土器

可能性がある。17は明灰色を呈し，胎土は緻密で白色砂粒を含む。下方に１条の輪積み痕が見える。18は表面暗灰色，裏面灰色で，上部に浅い沈線がめぐっている。胎土は緻密で，白色砂粒が観察される。表面調整は雑で，横ナデ後の凹凸が残されている。

19・20は甕形土器底部である。19は暗褐色で，胴部には横ヘラケズリが認められる。20は褐色で，胴部・底部ともにヘラケズリが施される。

21～24は甕形土器胴部に施されたタタキ目資料である。21～23は須恵窯で焼かれたと思われる赤褐色を呈する赤焼土器で，胎土は共通してわずかに石英・白色砂粒が含まれている。24は須恵器である。21は頚部直下の破片で，頚部は横ナデされ，胴部には縦方向の平行タタキ目がみられる。22は頚部と最大経部の中間の胴肩部破片に，縦方向の平行タタキ目が施されている。23も頚部に近い胴上位破片で，胎土中の夾雑物はやや多い。縦方向の平行タタキ目であるが，前二者とタタキ工具が異なり，条の幅が広く間隔も粗くなっている。24は明灰色の緻密な胎土に，外面が暗緑色に皮膜されている。タタキは横方向に行われた後，縦方向に部分的に重ねられている。

以上，この遺物包含層から出土した代表的な土器について説明したが，最後に全体的な土器相の年代性に言及しておこう。坏形土器の多くがロクロを使用していたことから，おおむねこの土器相が奈良・平安時代に属することが理解できる。そのことは甕形土器についてもいえることで，上述した３タイプの口縁形態が併存するのはこの時期をおいてほかにない。それでは奈良・平安時代のいつ頃を中心とするかといえば，二重口縁のくすべ焼成土器や赤焼土器が普及していたことから，奈良時代の初期や前半よりも遅くなることは判断できる。いっぽうで，平安時代中・後期に下る新しい要素は見あたらないので，それ以前の時期におさえられるであろう。以上の考察から，この土器相は奈良時代後期から平安時代前期の様相を示していると結論できよう。なお，16は年代上特殊な資料で，古墳時代初期の特徴を備えている点が注意される。

# 第4章　ま　と　め（第8図）

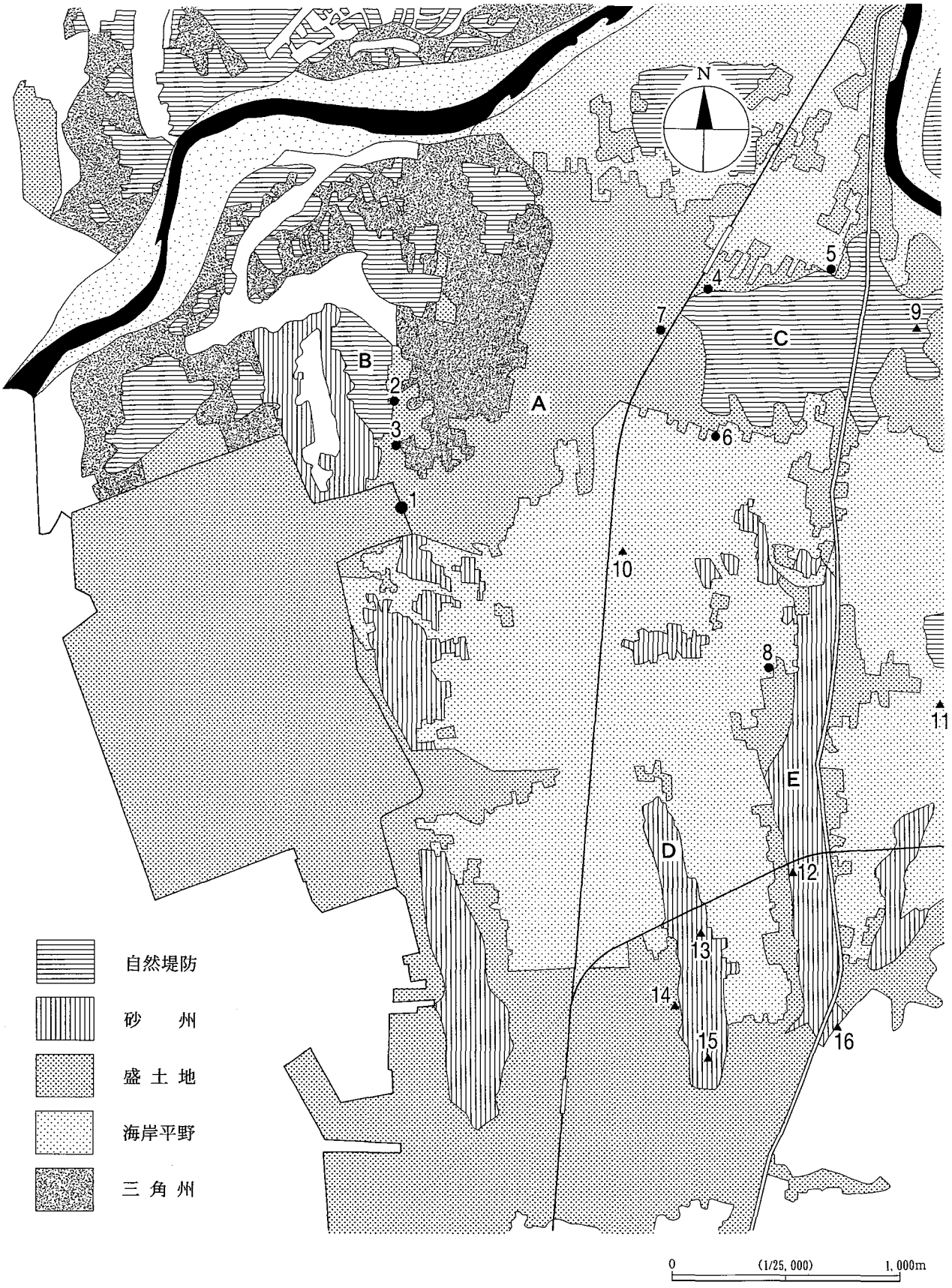
今回調査した田向遺跡の調査地点は，小櫃川河口に近い海岸付近の低地に立地している。検出された遺構は，河海の氾濫後の一時的な自然流路に堆積した，奈良時代後期から平安時代前期にかけての遺物包含層である。

この成果をふまえて，過去二度にわたって実施された，本遺跡の総合的な遺構分布の傾向について述べてみよう。第１～３次調査では竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸状遺構・水田跡・畑跡等が，第４・５次調査では掘立柱建物跡等が検出され，今回は人為的な遺構は検出されなかった。この現象は北側に遺構が濃密に分布し，南下するにつれ遺構が希薄になることをものがたっている。そのことはとりもなおさず，田向遺跡の中心の所在を暗示しているといえよう。以上の遺構分布の傾向を遺跡立地の点から理解するために，田向遺跡とともに，第２章で紹介した周辺の諸遺跡をもあわせて，土地条件図上に乗せて考察しよう。

さて，田向遺跡の調査された３地点は，小谷状の盛土地の上に南北に連なっている。この盛土地の南にはさらに巨大な盛土地（A）が接している。盛土地（A）は小櫃川の旧河道とみなされ，本遺跡の乗る盛土地は，それに合流する支谷の関係にあるのであろう。ところで，田向遺跡の北部ほど遺構密度が高くなるという傾向は，自然堤防（B）に近づくほど遺構が頻出すると言い換えることができるかもしれない。盛土地は本来低湿地であり，水田耕作には適しているが，湿気が多いため住環境としては不向きである。本遺跡周辺で住環境に恵まれている地形は，微高地としての自然堤防であり，砂州がそれに準じるであろう。したがって田向遺跡の中心部は，自然堤防（B）に求められる可能性がある。一般的に自然堤防上には，現在も含めて集落（跡）が集中する傾向を認めることができる。これに対して，第８図中央を占める広大な海岸平野に遺跡が乏しいことは，そこが住空間ではなく，水田や畑等の生産の場として利用されていたのであろう。この対応関係から，微高地上には集落跡が成立して，周囲の低地帯には水田が展開するという図式的空間を想定することが可能となる。

この図式的な関係は，東方の本郷・高柳市街地がある自然堤防（C）の周辺においてもあてはまる。自然堤防（C）の外縁部には集落跡を中心とする各時代の遺跡が発見されている。いずれも限定された面積内での調査成果であって，遺跡の全貌を知ることはできないが，各遺跡の集落中心部や本体は，自然堤防（C）上にあるとみてよいであろう。そして水田や畑等の農業施設は，周辺の盛土地や海岸平野に配置されたと考えられるのである。

田向遺跡近郊で推定された住空間と農空間の組み合わせは，さらに広域範囲に適用できる可能性がある。小櫃川は図示範囲外のすぐ東方で南北に蛇行しており，その流域には豊かな海岸平野が広がっている。その海岸平野の中には，大小多数の自然堤防が点在している。田向遺跡は，小櫃川を挟んで海岸平野と自然堤防が織りなす広大なパッチワーク地帯の末端に位置しているのである。この地域では現在においてもそうであるように，古代においても海岸平野に点在する自然堤防上に集落が建設され，周辺低地が農地として利用されていたのであろう。古墳時代に後述する大型前方後円墳を造営し得た生産基盤は，この地域に存在していたといえる。




第８図　土地条件と遺跡の立地

第２章で紹介したように，この地域では古墳時代後期を中心に，大型前方後円墳が少なからず造営されるのであるが，その立地にも地形的特徴がうかがえる。金鈴塚古墳・さかもり塚古墳・稲荷塚古墳は砂州（D）に，丸山古墳・鳥越古墳は砂州（E）上に造られている。このほか銚子塚古墳や浅間古墳は海岸平野に築かれているが，多数の大型前方後円墳は砂州に立地しているのである。図からわかるように，これらの砂州は周囲からも際だつ微高地で，細長い地形が丘陵尾根に類似していることから，この地域の広大な海岸平野を支配した在地首長層の墓域好適地として選定されたのではなかろうか。小櫃川の河口を間近に望む位置取りも，出入りする船舶を見下ろす在地首長の墓域にふさわしい。とすれば，同時代の一般集落はこれらの砂州からは排除されていたはずであるが，その当否は今後の発掘調査の進展に待つほかない。

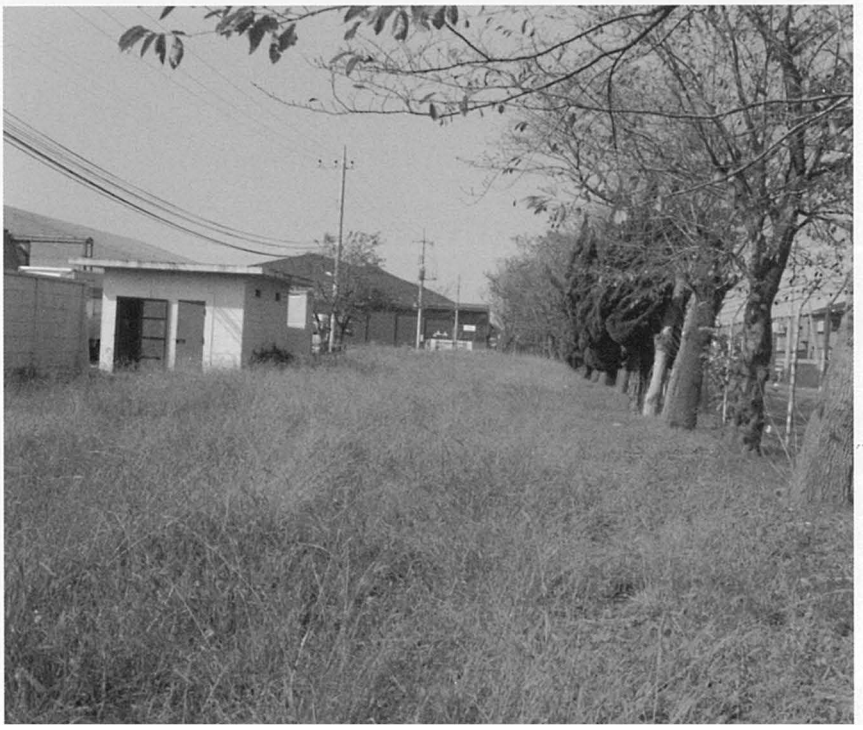
# 写 真 図 版

田向遺跡周辺の航空写真

図版２

北部調査区（北から）

南部調査区（北から）



南部調査区（南から）

トレンチセクション A-A′

トレンチセクション B-B′

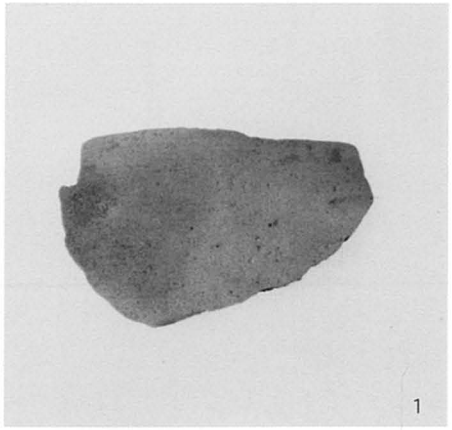
トレンチセクション C-C′

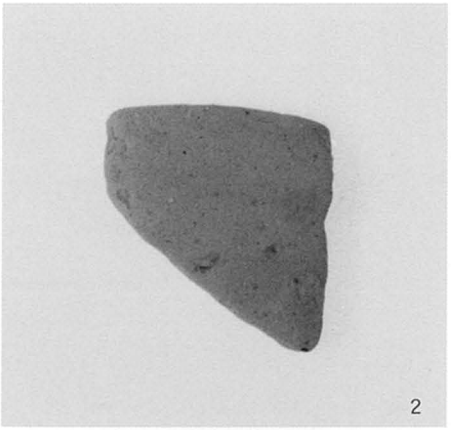
トレンチセクション D-D′

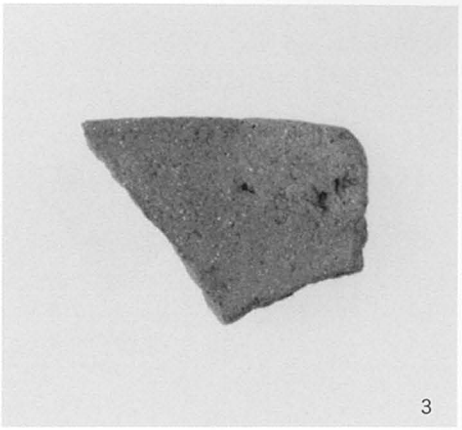
トレンチセクション E-E′

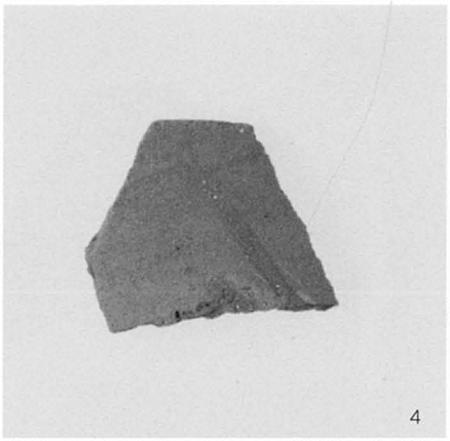
拡張区遺物出土状況（上部）

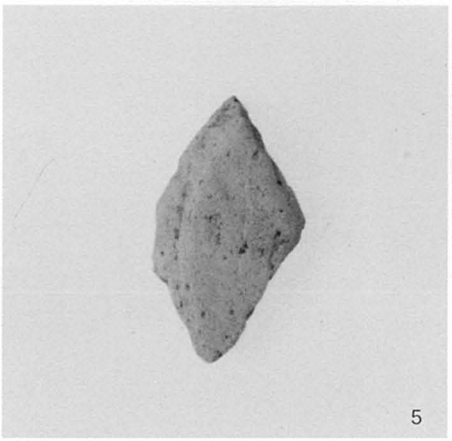
拡張区遺物出土状況（下部）

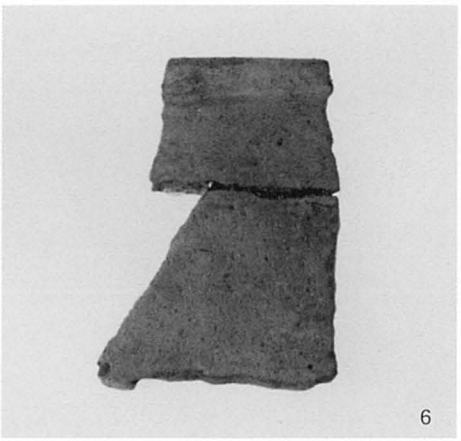


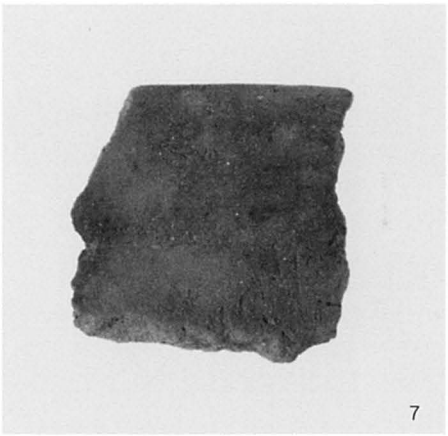



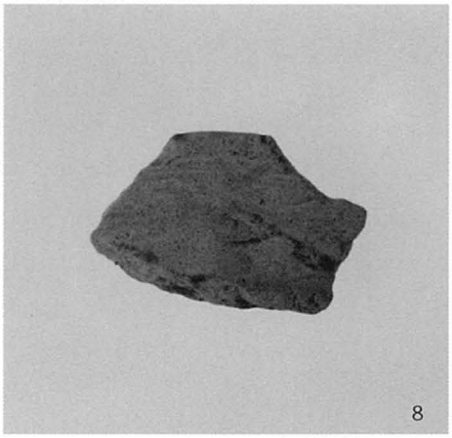



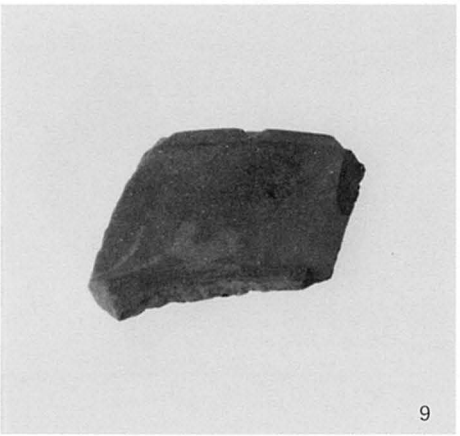



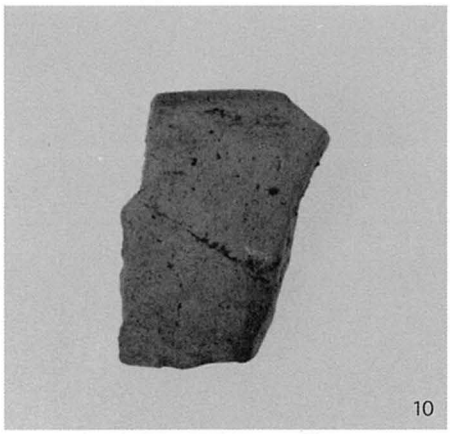



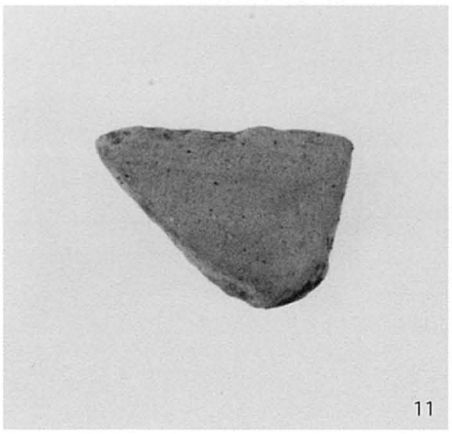



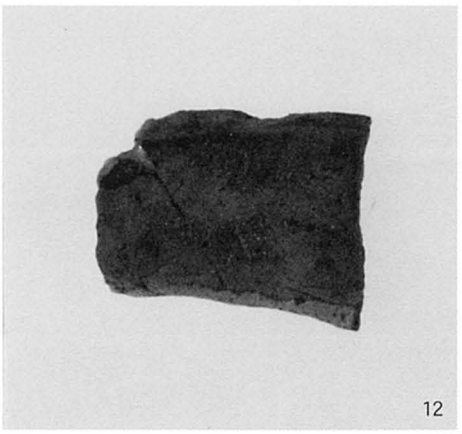



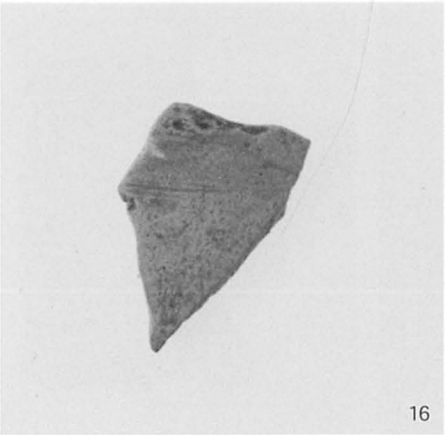



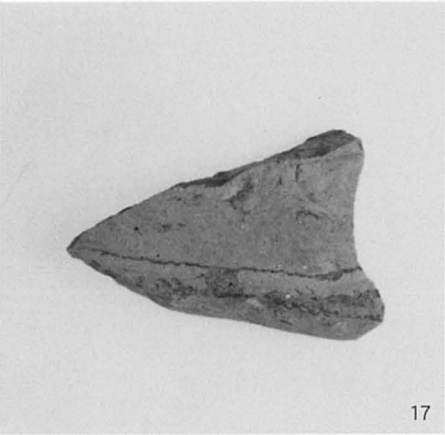

出土遺物（１）

13

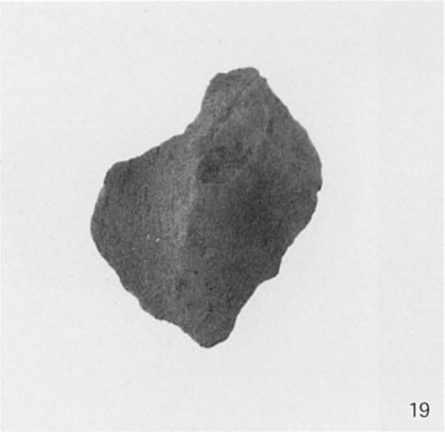
14

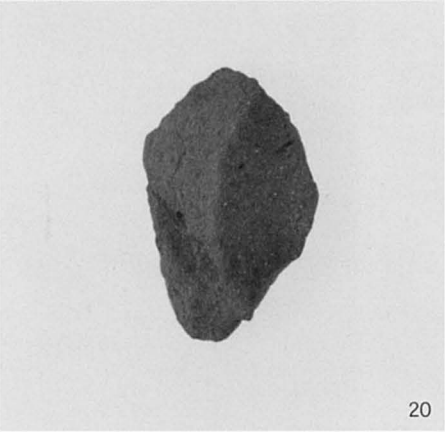
15


16

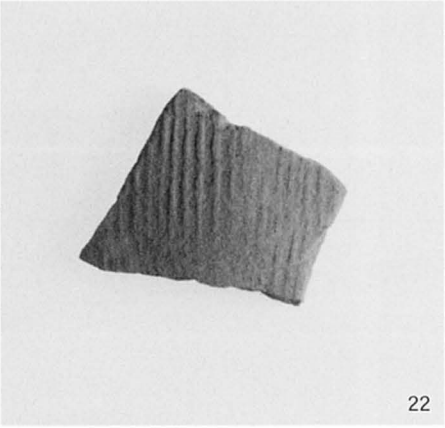

17

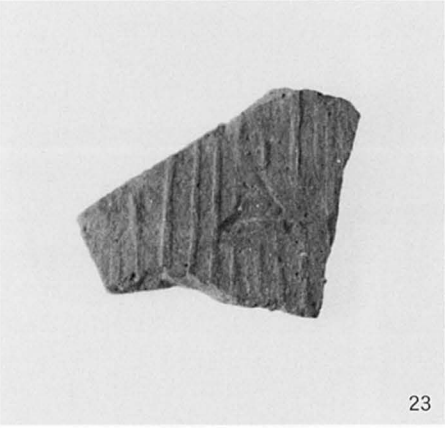
18

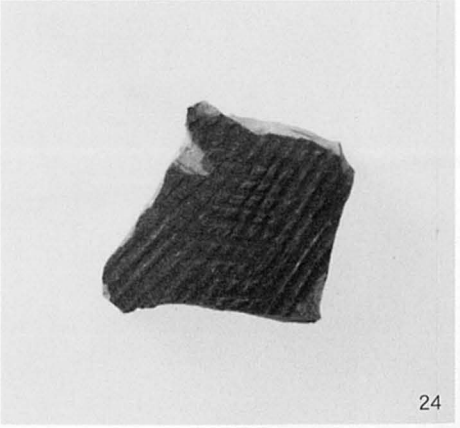

19


20

21


22


23


24

出土遺物（2）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | きさらづし　たむかいいせき |
| 書名 | 木更津市田向遺跡 |
| 副書名 | 住宅市街地基盤整備埋蔵文化財調査報告書 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 財団法人千葉県教育振興財団調査報告 |
| シリーズ番号 | 第637集 |
| 編著者名 | 雨宮龍太郎 |
| 編集機関 | 財団法人　千葉県教育振興財団文化財センター |
| 所在地 | 〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　　TEL 043-424-4848 |
| 発行年月日 | 西暦2010年２月25日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 経緯度 | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| たむかいいせき<br>田向遺跡 | ちばけんきさらづ<br>千葉県木更津<br>しえがわあざまわ<br>市江川字廻り<br>だ<br>田615-3ほか | 206 | 019 | 35度<br>24分<br>05秒 | 139度<br>55分<br>20秒 | 20091015<br>～<br>20091029 | 2,147㎡ | 住宅市街地基盤整備 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 田向遺跡 | 遺物包含層 | 奈良･平安時代 | 遺物包含層　1か所 | 奈良・平安時代土師器，須恵器 | |

| | |
|---|---|
| 要約 | 遺跡は小櫃川河口南岸の低地帯に立地する。検出された遺構は奈良・平安時代の土器を主体とする遺物包含層である。この包含層は，河海の氾濫の際に生じた小規模な自然流路中に形成されたものである。 |

千葉県教育振興財団調査報告第637集

# 木更津市田向遺跡

－住宅市街地基盤整備埋蔵文化財調査報告書－

平成22年２月25日発行

編　　集　　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　　行　　千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町１－１

財団法人　千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　　刷　　株式会社ライフ
成田市東和田595番地